

太宰治〈津軽通信〉研究——終戦直後に描かれる津軽の人々との交流——

教育内容・方法開発専攻

文化表現系教育コース

言語系教育分野(国語)

M11160H

池嶋 達矢

1、研究の目的

太宰治は昭和二十年八月の終戦を、津軽金木の生家において迎える。太宰は終戦直後から、「庭」を始め、短期間に短篇小説を相次いで発表している。その中でも「庭」を含む、津軽の人々との交流を描いた短篇五作は、作品集『冬の花火』刊行の際に、「津軽通信」の総題の下に集成される。いずれも太宰と同一視して読むことのできる「私」が語り手として設定され、「津軽通信」という総題にも表れるように、津軽の人々の様子、あるいは自らの状況を伝えるための通信・書簡のような作品群である。

だが、これらの作品は単なる津軽の人々との交遊録だと単純には言い切れない側面を持つ。総体としての「津軽人」に向けられた輻輳する思惑や、当時の社会風潮に対する反発心も窺えるという、ある種の複雑さを秘めているのだ。本文には難解な表現や、表立った思想表白が少なく、一見、比較的容易に読解できるかのような趣を備えているためか、太宰文学転換期の創作であるにもかかわらず、これまでの太宰研究の中であまり顧みられてこなかった

本論は、「津軽通信」下の諸作を詳細に読み、執筆時作品に込められた作者太宰の意図を捉えることを明らかにしようとするものである。

はじめに

第一章 「庭」

第一節、先行研究と問題点

第二節、〈分を弁える〉ということ

第三節、弟の〈まよい〉の意味

第四節、便乗主義批判である可能性

第二章 「親といふ二字」

第一節、先行研究の問題点

第二節 〈父〉としての「爺さん」

第三節 〈父〉としての「私」

第四節、戦後短篇の明るさ

第三章 「嘘」と「やんぬる哉」

第一節、連動する可能性

第二節、「嘘」——梓内、聞き書き部分の解釈

第三節、「嘘」——結末部の解釈

第四節、「やんぬる哉」

終わりに

3、本論の概要および研究成果

「庭」は、「庭」では、本文を通して自らの居場所や上位者との関係性の保ち方を再確認してゆく様子を論じた。戦時下をなんとか生き延び、いつも変わらない兄の元に自らの存在を確認できた安堵感を作品に描き出そうとしたものだったと言えよう。積極的に何かを発信しようとする姿勢はあまり見られないが、上位者である兄との関係性を素直に受け

容れることによって守られ、その中で自由が生じることを示した作品であろう。

「親といふ二字」は「無筆の親」の娘に対する愚直で不器用な愛情に触れたことを描き、周縁世界である津軽にも戦禍が及んでいることを、戦時下における「色男気取りの議論」の責任とともに発信していた。後半においては、私の父としてのふがいなさが強調され、読みに幅が生じる作品であった。単に、悲しみだけを発信する小説ではなく、物語としての面白さも追求され、ふがない父＝太宰なりに職業作家としての技術を見せつけた作品であったと言えよう。

「嘘」と「やんぬる哉」は共に同級生を描き、結末における微笑が共通する事などから、関連づけて論じた。「嘘」も「やんぬる哉」も物語の大半が「私」以外の人物の語りとして展開されている。その複雑な語りの構造を有し、さらに読みを一転させ得る〈オチ〉があることから、解釈にややばらつきの生じる作品であった。「嘘」は戦時下の徴兵逃れのエピソードの中で、女性の嘘が描かれる。これも疎開する太宰ならではの小説であって、戦時下における苦労話を津軽の地から発信している。しかし、物語の大半を占める「女の嘘」のエピソードを名誉職が語り終えた後に、その語りを一蹴するかのような「私」は「頗る軽薄な感想」を述べる。その一言が「女の嘘の恐ろしさ」とは違った着地点を用意し、最終的に「男は嘘をつくことをやめて」という冒頭の言葉に、物語は還ってゆく。名誉職の微笑ましい朴直さに収斂してゆくことによって、戦時の苦労話が健康的な明るさを持って終結していた。そして、「やんぬる哉」では「私」の中学校の同級生である医師が登場する。こ

の作品は他とは異なり、相手に対して嫌悪感を露わにしている。「嘘」の名誉職と医師を比較することによって、太宰の当時の他人に対する好悪の理由を明らかにした。「私」は医師に嫌悪感を抱きはするものの、「私」はこらえて微笑を浮かべ、結末の展開では、「私」の意図しないところで医師へのある意味仕返しができるしまう滑稽なオチを形成している。

本研究によって、「津軽通信」下の作品が、共通して意外性と滑稽さを兼ね備えた結末を持っていることが分かった。戦争が残した暗い影の中で、少しでも明るさを求め、屈託しない太宰の姿が見えてくる。「パンドラの匣」で求めた、「焼跡の隅のわづかな青草でも美しくうたつてくれる詩人」が思い出されよう。また、語り手が全て太宰と同一視できる「私」であることでも共通している。作品に描かれた内容に真実味が加わり、津軽の、また太宰の実情として読者に伝えられているのだ。当時太宰が必要とした人物像、あるいは嫌った人物像が、四作品の分析によって明らかになった。

4、今後の課題

同時期の短篇は他にも数多くある。また、あまり論じられていない作品が多く、複雑な語りの構造を持つ作品が多い。太宰の短篇の方法を知る上で、まだ、研究の余地があると言えよう。

主任指導教員 前田貞昭

指導教員 前田貞昭